

薬井瀧ノ北遺跡  
舟戸・西岡遺跡



2005年3月

(奈良県北葛城郡)  
河合町教育委員会

## 序

河合町は奈良盆地の西部に位置し、古代より大和の多くの河川があい寄る「かわい」の地として重視され栄えてきました。

町内には、家屋文鏡をはじめ多数の遺物が出土した佐味田宝塚古墳、半分を築造当初の姿に復元したナガレ山古墳、典型的な帆立貝形の古墳として有名な乙女山古墳、大和川に面して造られた大塚山古墳群という4件の国指定史跡があります。他にも本殿が県指定文化財である廣瀬神社や飛鳥時代に創建されたと伝わる長林寺等、古墳以外にも多くの文化財が残されています。

さて、平成15年度に実施しました薬井瀧ノ北遺跡では、奈良時代初期の悲劇の宰相といわれる長屋王の邸に用いられた瓦と同じ型式の瓦が出土しました。河合町の西部を含む葛下川流域の地域は古代より「片岡」と称された地域で、長屋王邸跡の調査で出土したおびただしい木簡から長屋王と深いかかわりのあった地域であったことが判っていましたが、今回の調査で、片岡の地域内で長屋王とのかかわりを示す遺物が出土したことは、この地域の歴史を知る上で、大きな成果であったと思われます。

河合町は馬見丘陵に点在する古墳だけではなく、その他にも多くの遺産が眠っているということを知ることができました。これらの先人が残した遺産を今後の町づくりに活かしてゆきたいと思います。

最後になりましたが、調査及び本書の作成にあたってお世話になりました関係各位に厚く御礼申し上げます。

河合町長 岡井康徳

## 例　　言

1. 本書は2003(平成15)年度及び2004(平成16)年度に河合町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けて実施した薺井瀧ノ北遺跡及び舟戸・西岡遺跡の発掘調査報告書である。
2. 薺井瀧ノ北遺跡の現地調査は平成16年2月23日に開始し、平成16年3月31日に終了した。  
舟戸・西岡遺跡の現地調査は平成17年2月7日に開始し、平成17年2月18日に終了した。
3. 調査組織は次のとおりである。

### 薺井瀧ノ北遺跡

調査主体 河合町教育委員会

調査担当者 河合町教育委員会事務局 生涯学習課 文化財保存係 吉村公男

調査補助員 岡田雅彦(奈良大学)、小林美佐子、西村恵子(京都橘女子大学)、松原智子(当時京都橘女子大學)

調査事務局 河合町教育委員会事務局 生涯学習課 文化財保存係

教育長・川邊興司 教育次長・西野宗次 課長・和田宅司 係長・吉村公男 主事補・藤岡教  
舟戸・西岡遺跡

調査主体 河合町教育委員会

調査担当者 河合町教育委員会事務局 生涯学習課 文化財保存係 吉村公男

調査補助員 岡田雅彦(奈良大学)、小林美佐子、西村恵子(京都橘女子大学)

調査事務局 河合町教育委員会事務局 生涯学習課 文化財保存係

教育長・川邊興司 教育次長・西野宗次 課長・木村光弘 補佐・岡田昌浩 係長・吉村公男  
主事・枚本光清(生涯学習第1係)、木村浩章(生涯学習第1係)

4. 発掘作業は安西工業株式会社に委託した。

5. 写真は航空写真を株式会社アイシーに委託し、遺構及び遺物は吉村が撮影した。

6. 本書を作成するにあたり下記の諸機関並びに諸氏のご指導・ご協力いただいた。ここに記して謝意を表する。

奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、奈良文化財研究所、岡田伊平、仲井寛治、西川嘉一、森郁夫、  
町田章、河上邦彦、久保功、辰巳和弘、牛鶴茂、今井見樹、岡島永昌、櫻井恵、浜中邦弘、浜中有紀、平田政彦、  
廣岡孝信、南部裕樹、河合町郷土を学ぶ会 河合町文化財ガイドの会 (敬称略、順不同)

7. 図1は国土地理院発行の1:25,000地形図「信貴山」(平成13年7月1日発行)及び「大和高田」(平成14年4月1日発行)をもとに作成した。図2は河合町発行の1:2,500河合町全図1・3(平成4年修正)をもとに作成した。図14は1:2,500河合町全図1(平成4年修正)をもとに作成した。
8. 土層の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖22版」に掲った。
9. 発掘調査により出土した遺物、及び図面・写真等の記録類の全ては河合町教育委員会で保管している。
10. 遺物の整理及び本書の作成は吉村、岡田、小林、西村が行った。
11. 本書の執筆は1-(3)を岡田が、その他は吉村が行い、編集は吉村が行った。

## 本文目次

### 1 葉井瀧ノ北遺跡の調査

#### (1) はじめに

調査の契機と経過	1
位置と環境	1

(2) 遺構	4
--------	---

#### (3) 遺物

軒丸瓦	8
軒平瓦	8
丸瓦	11
平瓦	11
隅切平瓦	12
熨斗瓦	19
面戸瓦	19
道具瓦	19

(4)まとめ	21
--------	----

### 2 舟戸・西岡遺跡の調査

(1) はじめに	23
----------	----

(2) 遺構	24
--------	----

(3) 遺物	27
--------	----

(4)まとめ	28
--------	----

## 挿図目次

図1 葉井瀧ノ北遺跡及び舟戸・西岡遺跡と周辺の遺跡分布図	2
図2 葉井瀧ノ北遺跡調査地位置図	3
図3 葉井瀧ノ北遺跡第1トレチ平面図及び土層断面図	5~6
図4 葉井瀧ノ北遺跡調査トレチ配置図	7
図5 葉井瀧ノ北遺跡出土瓦（1）軒丸瓦・軒平瓦	9
図6 葉井瀧ノ北遺跡出土瓦（2）軒平瓦	10
図7 葉井瀧ノ北遺跡出土瓦（3）丸瓦・平瓦	13
図8 葉井瀧ノ北遺跡出土瓦（4）平瓦	14~15
図9 葉井瀧ノ北遺跡出土瓦（5）平瓦・隅切平瓦	16~17
図10 葉井瀧ノ北遺跡出土瓦（6）熨斗瓦	18
図11 葉井瀧ノ北遺跡出土瓦（7）面戸瓦・道具瓦	20

図12 舟戸・西岡遺跡調査地位置図	23
図13 舟戸・西岡遺跡調査トレンチ配置図	24
図14 舟戸・西岡遺跡第1トレンチ平面図及び土層断面図	25
図15 舟戸・西岡遺跡第2トレンチ平面図及び土層断面図	26
図16 舟戸・西岡遺跡出土遺物	27

## 図 版 目 次

図版1 薩井瀧ノ北遺跡	①片岡地域と薩井瀧ノ北遺跡（北上空から） ②第1トレンチ灰原半掘状況（南から）
図版2 薩井瀧ノ北遺跡	①遺跡全景（西上空から） ②調査地全景航空写真（垂直）
図版3 薩井瀧ノ北遺跡	①調査地遠景（西から） ②第1トレンチ調査前（北から） ③第1トレンチ調査前（南から）
図版4 薩井瀧ノ北遺跡	第1トレンチ ①灰原検出状況（西から） ②灰原検出状況（東拡張後・南から） ③西拡張区瓦充填暗渠検出状況
図版5 薩井瀧ノ北遺跡	第1トレンチ ①灰原検出状況（西拡張後・南から） ②灰原検出状況（西拡張後・西から） ③灰原検出状況（西拡張後・東から）
図版6 薩井瀧ノ北遺跡	第1トレンチ ①南側半掘状況（南から） ②南側半掘状況（西から）
図版7 薩井瀧ノ北遺跡	第1トレンチ ①南側半掘状況（東から） ②焼土塊検出状況（東から） ③焚口付近（西から）
図版8 薩井瀧ノ北遺跡	①第4トレンチ（西から） ②第5トレンチ（北から） ③第6トレンチ（西から）
図版9 薩井瀧ノ北遺跡	出土遺物（1）軒平瓦
図版10 薩井瀧ノ北遺跡	出土遺物（2）平瓦（凹面）
図版11 薩井瀧ノ北遺跡	出土遺物（3）平瓦（凸面）
図版12 薩井瀧ノ北遺跡	出土遺物（4）熨斗瓦（凸面）
図版13 薩井瀧ノ北遺跡	出土遺物（5）熨斗瓦（凹面）
図版14 薩井瀧ノ北遺跡	出土遺物（6）面戸瓦・道具瓦・丸瓦（凸面）
図版15 薩井瀧ノ北遺跡	出土遺物（7）面戸瓦・道具瓦・丸瓦（凹面）
図版16 薩井瀧ノ北遺跡	出土遺物（8）軒丸瓦・軒平瓦
図版17 舟戸・西岡遺跡	①遺跡全景（東上空から） ②調査地全景航空写真（垂直）
図版18 舟戸・西岡遺跡	①調査地遠景（西から） ②第2トレンチ調査前（東から） ③第1トレンチ掘削状況（北から）
図版19 舟戸・西岡遺跡	第1トレンチ ①遺構検出状況（北から） ②遺構完掘状況（北から） ③遺構完掘状況（北東から）
図版20 舟戸・西岡遺跡	第2トレンチ ①遺構検出状況（西から） ②遺構完掘状況（西から） ③遺構完掘状況（東から）

## 1. 薬井瀧ノ北遺跡の調査

### (1) はじめに

#### 調査の契機と経過

薬井瀧ノ北遺跡は、河合町の西端、大字薬井に所在する「奈良県遺跡地図10-B-68」の遺物散布地である。この散布地は1989年度に実施した町内遺跡詳細分布調査により新規に確認された散布地である。遺物の散布範囲がほぼ小字瀧ノ北の範囲に該当するため、今回新たに小字名を加えて薬井瀧ノ北遺跡とした。薬井地内では過去に全く発掘調査が実施されたことはなく、この遺跡も薬井集落の南側に広がる田畑に石器・土師器・須恵器が散布していることが知られるのみで、遺跡の内容は全く判明していない。この遺跡の東側には西大和ニュータウンが拡張り、遺跡の間際まで宅地開発が及びつつある状況である。

このような状況の中で、今回の調査地周辺では飛鳥時代から奈良時代にかけての古瓦が出土するという話を平成13年頃に薬井総代岡田伊平氏及び地権者仲井寛治氏から聞き及び、古代の瓦葺建物や瓦窯の存在が想定できた。折しも、遺物散布地範囲の南端部を含む地域で、王寺・河合・上牧の3町による静香苑葬祭場建設事業が計画されるに至り、この工事に先立つ緊急調査を平成16年1月26日より着手することになったため、当該遺跡の範囲と内容を確認する絶好の機会であると捉え、平成15年度町内遺跡発掘調査事業（範囲確認調査）として、遺跡の北端部に位置する薬井105番地・106番地での発掘調査を実施した。

なお、静香苑葬祭場建設事業に伴う発掘調査では、中世から近世にかけて尾根上の平坦面を拡張して耕地が造られて行く状況を復元できる成果があった。緩傾斜地を利用して耕地が造られ、段階的に拡げて行く様子がわかった。傾斜の急な最上段の耕作地では水平面を確保できずに畠として利用するように造成を行っていた。また、耕作地の造成を行った初期には、幅1メートル強で東西方に向長い小さな区画が、尾根の方向に平行して並んでおり、畠として利用されていたものと思われる。

#### 位置と環境

薬井瀧ノ北遺跡のある薬井では弘法大師が掘削したと伝える「薬井」が知られているが、考古学的な遺跡としては当該遺物散布地が知られるのみであり、河合町内でも遺跡の分布が希薄な地域と考えられてきた。しかし、隣接する王寺町・上牧町には6世紀から8世紀代の遺跡が点在している。葛下川を中心とした地域として遺跡の分布をみると、6世紀から8世紀代の遺跡として王寺町域で岩才池北古墳・達磨寺古墳群・畠田古墳・西安寺・片岡王寺・上牧町域には下牧瓦窯跡、さらに南の香芝市域には平野古墳群・平野瓦窯跡・尼寺北廃寺・尼寺南廃寺などがある。この葛下川流域の地域は古代から「片岡」と称された地域であり、中世には上牧町下牧に片岡城が築かれ、豪族の片



図1 葉井瀧ノ北遺跡及び舟戸・西岡遺跡と周辺の遺跡分布図

岡氏が活躍した地である。

調査地はこれらの遺跡の中間地帯とでもいべき場所に位置している。現状では馬見丘陵の西支丘から西方へ向けて伸びる尾根上に形成された段々畑となっている。今回の調査地は段々畑の最上部に近い場所で、一段ごとの高さが高くなっている。2段分の畑を調査したが、そのうちの下段にあたる106番地の法面裾の水路及び里道より西方は傾斜が緩やかになり、台地状の地形を呈している。



図2 菜井瀬ノ北遺跡調査位置図

## (2) 遺構

仲井氏からの聞き取りをもとに、薬井105番地において瓦窯の存在を想定した。現状では果樹と野菜の栽培をおこなう畠として利用されている。この場所では約50年前に片岡王寺式の均整唐草文軒平瓦が採集されている。この瓦が採集されたとされる畠の南半部に調査区（第1トレンチ）を設定した。第1トレンチは、よく手入れされた柿の根や枝を傷めないよう、柿の木の間に南北12メートル、東西幅2メートルで設定し、人力により掘削を行った。現状で北から南に若干傾斜する地形である程度に考えていたが、105番地の中央部では現在の耕作土を除去するとすぐに地山が現れたが、南端部では現地表から1メートル程度掘り下げたところでも地山は検出できず、木炭や瓦破片が混じった黒色土を検出した。木炭や瓦の破片、焼土が多く混じっていることから、瓦窯の灰原を検出したものと考えられる。

その後、黒色土の広がる範囲を確認するため、まず、東側（山側）に東西2メートル、南北4メートルで拡張した。東側拡張部分の東端では焼土がみられ、部分的に地山面も確認した。

次いで、西側（谷側）へ東西2.5メートル、南北5メートル分の拡張を行った。この際に、排出土の置き場がないために、トレンチの北半分を埋め戻している。また、第2層を掘り下げていく過程で瓦を利用した排水溝を検出した。この溝に用いられた瓦は近世以降の瓦である。

さて、西側拡張部分では、黒色土はトレンチ外にまで広がるようである。今回の調査ではこの部分での105番地の法面裾部の調査は実施できなかったが、表土下に黒色土が見えている部分もあり、下方の106番地にまで及んでいることは確実とみられる。ただし、別窯の可能性も考慮しなければならないであろう。

最終的にトレンチ内で確認した炭や灰が堆積した黒色土は、東西約4メートル、南北約1.5メートル、深さ約60センチメートルの落ち込みを充填し、溢れるように東西5メートル、南北4メートル以上の範囲に広がっている。

この落ち込みの東側の地山が高くなっている、トレンチ東壁に沿うように南北幅約2メートル、東西幅約0.5メートルの範囲に焼土が見られ、焚口と考えられる。その先は調査区外になり不明である。また、トレンチ東端から約1.2メートルの位置で20センチメートル大の焼土塊が2つ検出されているが、これは窯が崩壊して窯体の一部が転落したものと考えられる。

中央断ち割り溝の南端から北側約80センチメートルの位置で、断ち割り時に柱穴状の穴を検出している。直径は上端で23センチメートル、底部で15センチメートルを測る。深さは20センチメートルである。底部は平底で、穴の中は8層の黒色土のみで満たされていた。平面では掘りかたは検出できなかった。この穴は8層が形成される直前まで開口しており、8層堆積時に埋没したことになる。あるいは柱様のものがあり、8層堆積後に抜き取られるなどの行為があったために8層の黒色土により充填されたと考えることもできるが、調査の過程ではそのような状況を示す痕跡は確認できなかった。

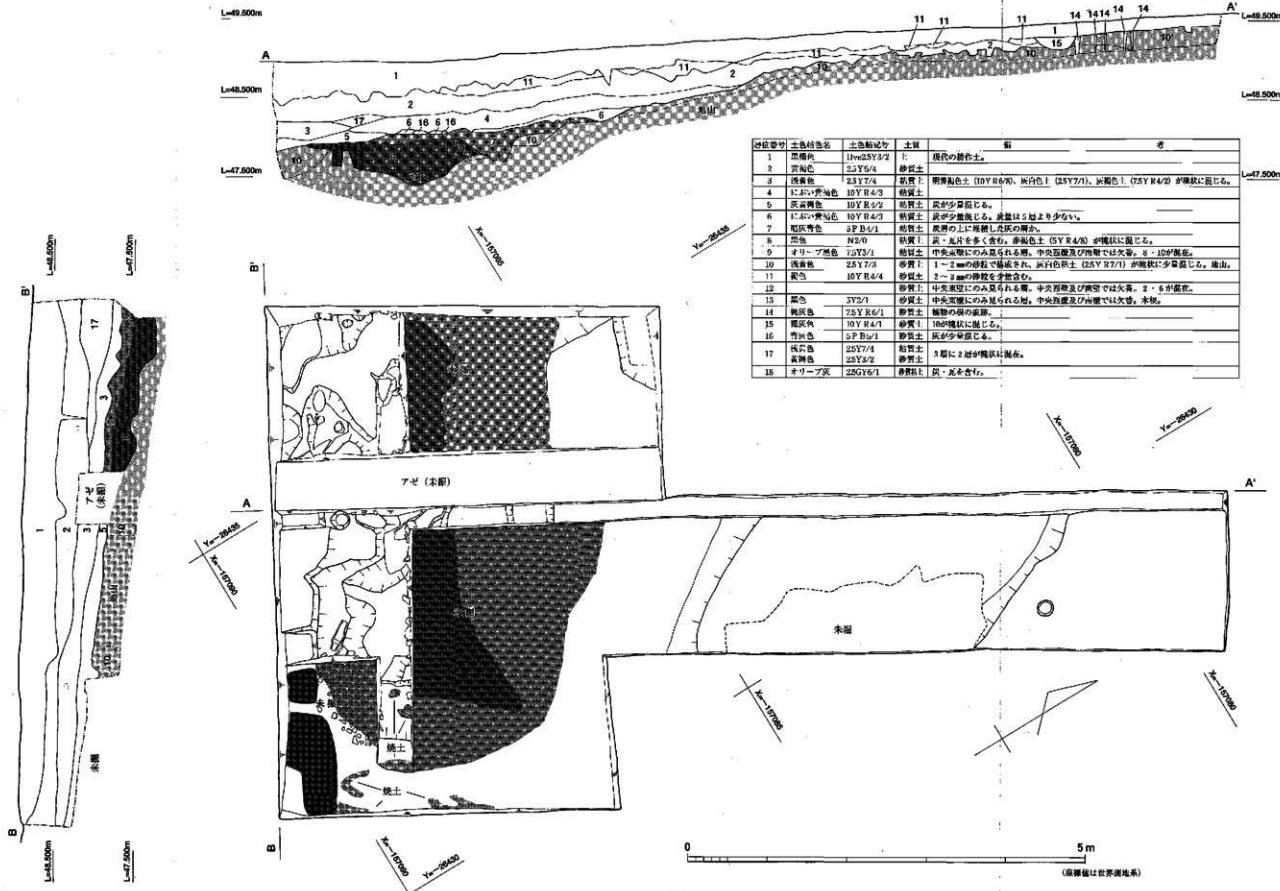


図3 萩井瀬ノ北造跡第1トレンチ平面図及び土層断面図

調査は灰原の南側半分を掘り下げて終了した。このため、窯本体の残存状況は不明である。ただし、灰原を埋めて堆積している土には中世の羽釜の破片とともに瓦の破片が見られ、中世以降に谷を埋めて耕作地とした時に窯本体はいくらか削平されているようである。耕作地の造成は尾根の中心から谷筋を埋めるようにして尾根上の耕作地を拡張している。調査地の南100メートルの地点で実施した静香苑葬祭場建設事業に伴う発掘調査で明らかになった状況と同じである。本来の尾根の傾斜の状況から比較すると、調査地での開発の方が先行するようである。これは、薬井の集落から近いという地理的な条件に起因するものであろう。

第1トレンチの層序は基本的には現在の耕作土層、中世～近世の耕作土層、灰原の堆積層の3層である。図3の土層断面図の第1層が現在の耕作土層である。第7・8層が灰原の堆積層で、これらの間の層が中世～近世の耕作土層（谷を埋めて造成した層）である。本来は第8層の上に第7層が覆いかぶさるように堆積していたものと思われるが、第7層の上面は造成時もしくはそれ以前に幾分削平を受けているようである。

第1トレンチの他、旧地形を確認するため105番地に2箇所、106番地に3箇所の計5箇所にトレンチを設けた（第2～6トレンチ）。

第2トレンチは第1トレンチの北東側に設けた調査区で、東西1.5メートル、南北2メートルで、現在の耕作土を除去すると地山である。

第3トレンチは第2トレンチの北側に設けた。東西2メートル、南北1.5メートルである。このトレンチでも耕作土を除去するとすぐ地山であった。

第4トレンチは105番地の下段、西隣の106番地に設けたトレンチで、南北2メートル、東西1メートルである。このトレンチでは耕作土は10センチメートル程度で、これを除去するとすぐ地山である。

第5トレンチは第4トレンチより北側、105番地の西側法面裾に接して設けたトレンチで、南北7メートル、東西1メートルで耕作土を僅かに除去すると地山面が現れる。

第6トレンチは第4トレンチの西側に設

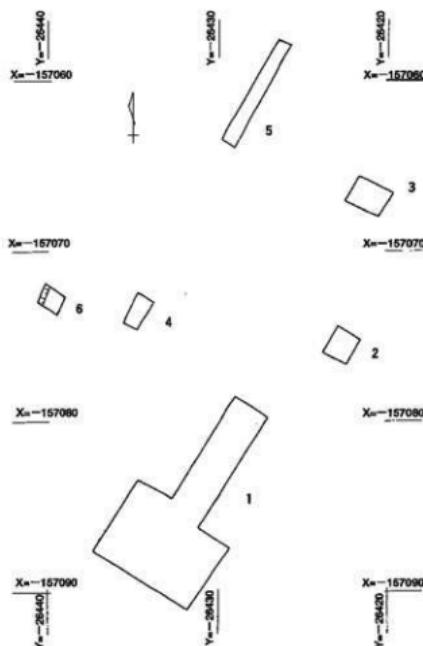


図4 薬井ノ北遺跡トレンチ配置図

けたトレンチで、南北1.5メートル、東西1.5メートルである。このトレンチではトレンチの西端で落ち込みが見られたが、耕作地を西へ拡げた造成の痕跡と見られる。

調査地で検出した瓦窯は谷の最深奥部に営まれているが、その谷の数箇所で古瓦の破片が散布しており、複数の窯跡が遺存しているようである。また、北側の尾根上には広い平坦部があり、工房跡等が残っている可能性も考えられる。

なお、第1トレンチの調査では、遺物は平箱で20箱分が出土した。灰原の調査にしては遺物量が少ないと印象もあるが、灰原全体の調査ではないので、他遺跡との比較は困難であろう。

### (3) 遺物

今回の調査では第1トレンチで検出された灰原から偏行唐草文軒平瓦・複弁蓮華文軒丸瓦を含む多量の瓦片が出土した。軒平瓦は型式番号6644C及び6644A、軒丸瓦は6272A及び6272Bで、長屋王邸跡で出土した瓦と同型式である。出土した軒瓦のうち、軒平瓦6644C及び軒丸瓦6272A・6272Bは小さな破片であり、また、焼成の状況も軟質で表面の微細な状況までは観察できないものが多く、範傷による同范関係の確定はできない。

軒瓦以外に特徴的な瓦として熨斗瓦・面戸瓦が多くみられる。また、丸瓦はほぼ完形のものが1点出土している。その他、平瓦、隅切平瓦、道具瓦が出土している。

瓦以外の遺物として、須恵器破片と木炭が出土している。

#### 軒丸瓦 (図5-1~8) ··· 6272型式のA、B種が出土。

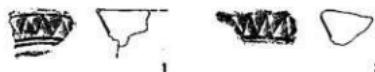
6272A 赤褐色のものと、白灰色のものが2点出土する。共に焼成は悪い。2点とも瓦当周縁に横ナデをおこなう。鋸歯文がB種に比べ平坦である。

6272B 色調は全て白灰色で6点出土し、全て焼成が悪い。外区外縁から外に平坦部を残す。この特徴は、長屋王邸出土の一部の6272B種に同じように見られる。A種と同じく瓦当周縁に横ナデをおこない、丸瓦部は縦ナデをおこなう。

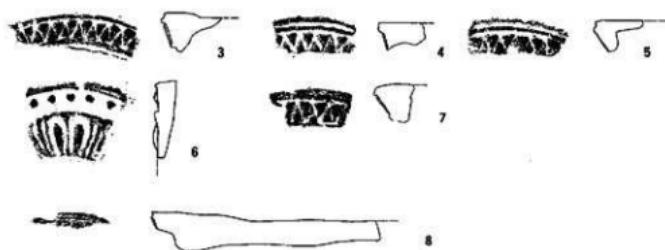
#### 軒平瓦 (図5-9~16・図6-18) ··· 6644型式のA、C種が出土。

6644A 灰色の焼成が良好のものと、白灰色の焼成の悪いものが6点出土する。段頸を持ち、頸部を数回に分けて横ケズリをおこなう。また頸部を下外区に沿って削り段を残さないもの(13)と、下外区に沿って削らなかったため、段を残すもの(12)・(18)とがある。また、脇区に沿って余分な粘土を削り、統けて内側縁を面取りするものもある。凹面は全体を縦ケズリし、瓦当沿いに横ケズリをおこなう。文様面には範傷は見当たらぬため、他の遺跡との比較は難しい。しかし、(18)の文様面に木目のような痕跡が多数見える。この特徴は鋸歯文部のみ残る資料(13)でも同じ場所に見えるため、偶然のものとは考えにくい。また、この特徴は青木庵寺や大安寺、觀世音寺出土例

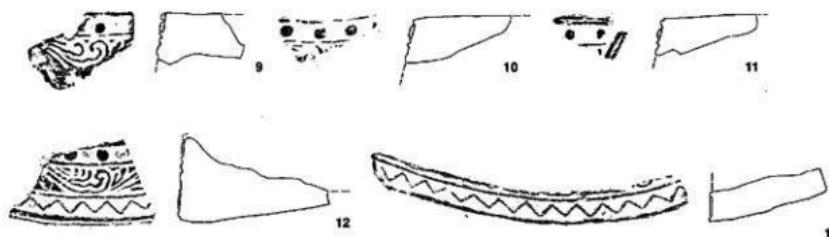
6272A



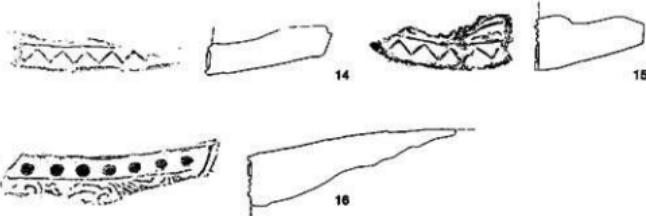
6272B



6644A



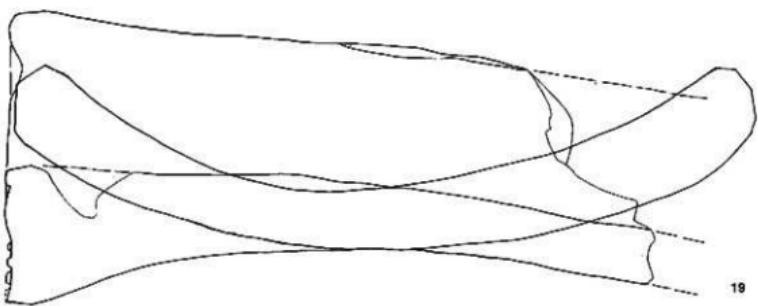
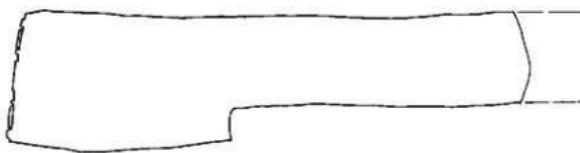
6644C



長林寺出土瓦



図5 菓井瀬ノ北邊跡出土瓦（1）軒丸瓦・軒平瓦



0 10cm

図6 葉井瀧ノ北遺跡出土瓦（2）軒平瓦

にかすかではあるが見られる。

6644C 灰色の焼成のいいものと、白灰色の焼成の悪いものが3点出土する。段額を持ち、凹面瓦当沿いを横ケズリする。

### 参考資料

片岡王寺式（図6-19）・・・薬井瀧ノ北遺跡で表採されたと伝えられるものである。しかし、今回の調査では1点も出土しておらず、他の窯資料の可能性がある。

額の形態は6644型式とは違ひ曲線額である。凹、凸面ともに縦ケズリをおこない、また、外側縁を面取りする。片岡王寺と同範であるが、上外区の殊文が省略される。この種は達磨寺で出土している。

長林寺出土6644型式（図5-17）・・・薬井瀧ノ北遺跡から出土はしていないが、ここで出土した6644型式に似たものが、長林寺から出土しているために紹介する。

唐草文の蓄が6644型式の中でも、特にB種に似ている。報告書では6644Aに似ているとして唐草文を7回反転して復元されている。しかし、鋸歯文が6644型式とは違ひ粗く、唐草文はB種をさらに退化した感じがある。額部は欠けているため見にくいか、他の6644型式とは違ひ曲線額の可能性が考えられる。これらのことから、6644型式でも他のものと時間差を考える必要がある。

丸瓦（図7-20・21）・・・今回の発掘では丸瓦の出土比率は低い。また、破片が多いので、ほぼ完形品で出土したもの（20）と、玉縁部がほぼ完形で発見されたもの（21）を紹介するのみにとどまる。

（20）は、全長42cmで、厚さは約2.1cmである。色調は白灰色で焼成は悪い。また、凸面は縦縄タタキをおこなうが、摩耗によりその他の調整は見えない。玉縁部は板で横ナデをおこなう。側面は内側縁を面取りし、外側縁は玉縁部の下から広端部まで面取りする。また、広端部内側縁も面取りする。

（21）は、色調は白灰色で焼成は悪い。凸面を板で横ナデし、水切りのような凹線を残す。内側縁と玉縁狭端部を横ケズリする。

平瓦（図7-22～図9-54）・・・薬井瀧ノ北遺跡において、完形品のものはなく全て破片で出土した。その中で側面が残り、ある程度形のわかる33点を抽出した。製作技法は桶巻作り（38）（39）と一枚作り（24）（47）の2種が確認できる。また後者は凸成形台でつくられたもの（24）と、凹成形台で作られたもの（47）とがある。しかし、これら4点以外はどのように作られたのか判断できるものはない。凸面は縦タタキをおこなっており、縦縄タタキと斜め縄タタキの2種類存在する。また、タタキの後、横ナデをおこなうものが多いため、タタキの存在がわからないものも多い。凹面

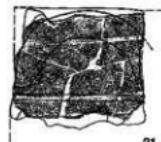
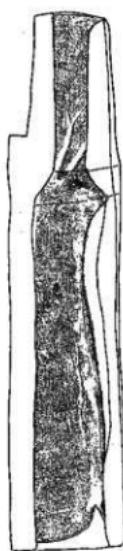
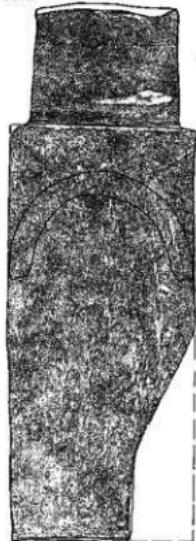
平瓦観察表

番号	タキ	タキ後の調整	凹調整	厚さ	焼成	色調	粒度	内外	備考
22	タテナワ	ヨコナデ	タテナデ	1.9	良	白灰色	79	○×	枠板痕
23	タテナワ	未調整	未調整	1.8	不良	白灰色	72	○×	枠板痕
24	タテナワ	ヨコナデ	未調整	2.2	良好	灰色	61	○×	一枚作り
25	タテナワ	ヨコナデ	未調整	2.1	良	白灰色	64	○×	
26	タテナワ	ヨコナデ	タテナデ	2.2	良好	暗灰色	78	○×	内面ナデ
27	タテナワ	未調整	未調整	2.2	不良	白灰色	73	○×	枠板痕、指紋
28	タテナワ	未調整	未調整	1.6	不良	白灰色	72	○×	枠板痕
29	タテナワ	ヨコナデ	タテナデ	1.7	良好	灰色	79	○○	
30	タテナワ	ヨコナデ	未調整	1.6	良好	灰色	60	○○	
31	タテナワ	ヨコナデ	不明	2.1	良	灰色	62	○○	
32	タテナワ	ヨコナデ	未調整	1.6	良	灰褐色	60	○○	
33	タテナワ	不明	未調整	1.6	良	灰褐色	79	○○	枠板痕
34	タテナワ	ヨコナデ	未調整	1.7	良好	灰色	79	○○	
35	タテナワ	ヨコナデ	未調整	1.7	良好	灰褐色	80/62	○○	枠板痕
36	ナナメナワ	ヨコナデ	未調整	1.2	良好	白灰色	61	○×	
37	ナナメナワ	ヨコナデ	未調整	1.5	良好	灰色	78	○×	枠板痕
38	ナナメナワ	ヨコナデ	未調整	1.0	良	白灰色	20	○×	枠板痕
39	ナナメナワ	ヨコナデ	未調整	1.5	良	白灰色	78	○×	桶巻作り
40	ナナメナワ	ヨコナデ	未調整	1.5	良好	灰色	73	○×	桶巻作り、枠板痕
41	ナナメナワ	ヨコナデ	未調整	1.8	良好	灰色	78	○○	枠板痕
42	ナナメナワ	ヨコナデ	未調整	1.8	良好	灰色	60	○○	枠板痕
43	ナナメナワ	ヨコナデ	未調整	1.5	良	白灰色	6	○○	枠板痕
44	ナナメナワ	ヨコナデ	未調整	1.6	良好	灰色	78	○○	枠板痕
45	ナナメナワ	ヨコナデ	未調整	1.8	良	褐灰色	62	○○	枠板痕
46	ナナメナワ	ヨコナデ	未調整	1.8	良	褐灰色	72	○○	枠板痕
47	不明	不明	不明	2.1	良	灰褐色	24		一枚作り、凸面に布目
48	不明	ヨコナデ	未調整	2.0	良好	灰色	78	○×	枠板痕
49	不明	不明	未調整	2.1	不良	灰褐色	80	○○	
50	不明	ヨコナデ	タテナデ	1.7	良	白灰色	64	○○	
51	不明	ヨコナデ	タテナデ	2.0	良好	褐灰色	80	○○	
52	不明	ヨコナデ	未調整	2.3	良好	灰色	80	○○	
53	不明	ヨコナデ	未調整	2.0	不良	白灰色		○○	広縫部完形
54	不明	ヨコナデ	タテケズリ	1.7	良好	灰色	64/80	○○	枠板痕

は未調整のものが多いが、一部縦ナデ、縦ケズリをおこなうものもある。厚さはバラバラで傾向は見にくい。側面調整は内側縁のみ面取りするもの、内外側縁を面取りするものと2種ある。また、内外側縁を面取りするものには、内と外が同じ幅面取りするもの、内の方が大きいもの、外の方が大きいものと3種類に分けることができそうである。

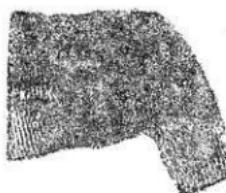
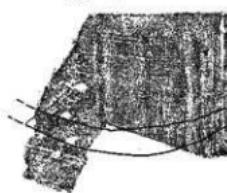
隅切平瓦（図9-55・56）・・・2点出土。2点とも約40度の角度で切り落とす。焼く前に隅平瓦として作る。

丸瓦

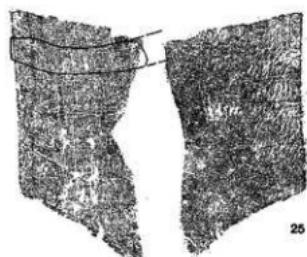


21

平瓦



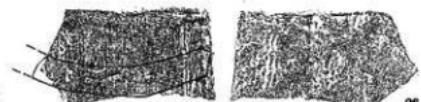
22



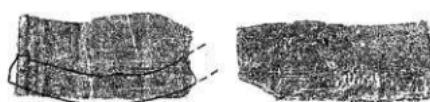
25



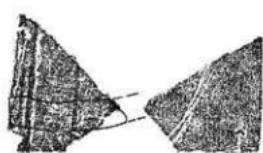
23



26



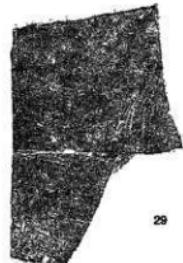
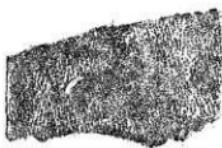
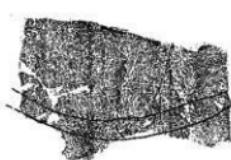
24



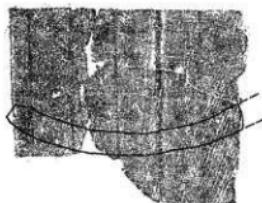
27

0 10cm

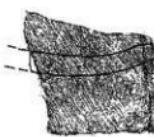
図7 菊井瀬ノ北遺跡出土瓦（3）丸瓦・平瓦



30



31



32

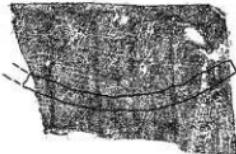


図8 菓井瀬ノ北



33



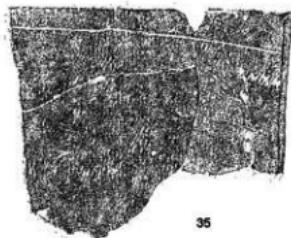
36



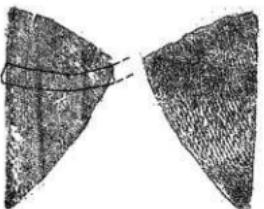
34



39



35



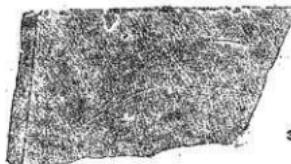
40



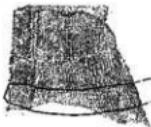
36



41



37



0

10cm



遺跡出土瓦（4）平瓦

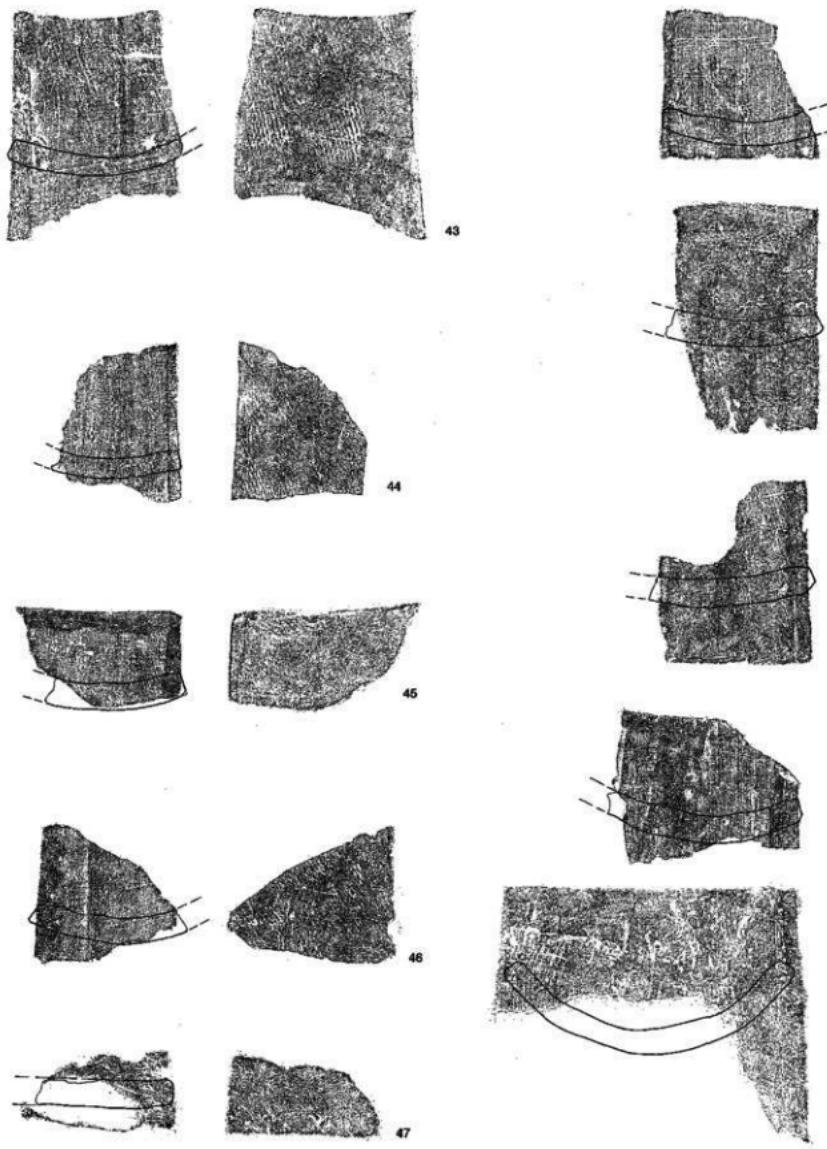
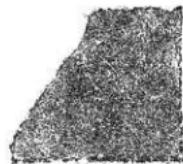


図9 菜井瀧ノ北遺跡



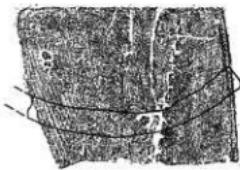
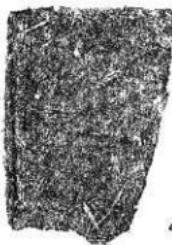
48



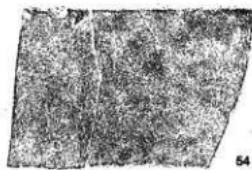
49



52



54



55



50

隔切平瓦



51



55



56



53



出土瓦（5）平瓦·隔切平瓦

熨斗瓦

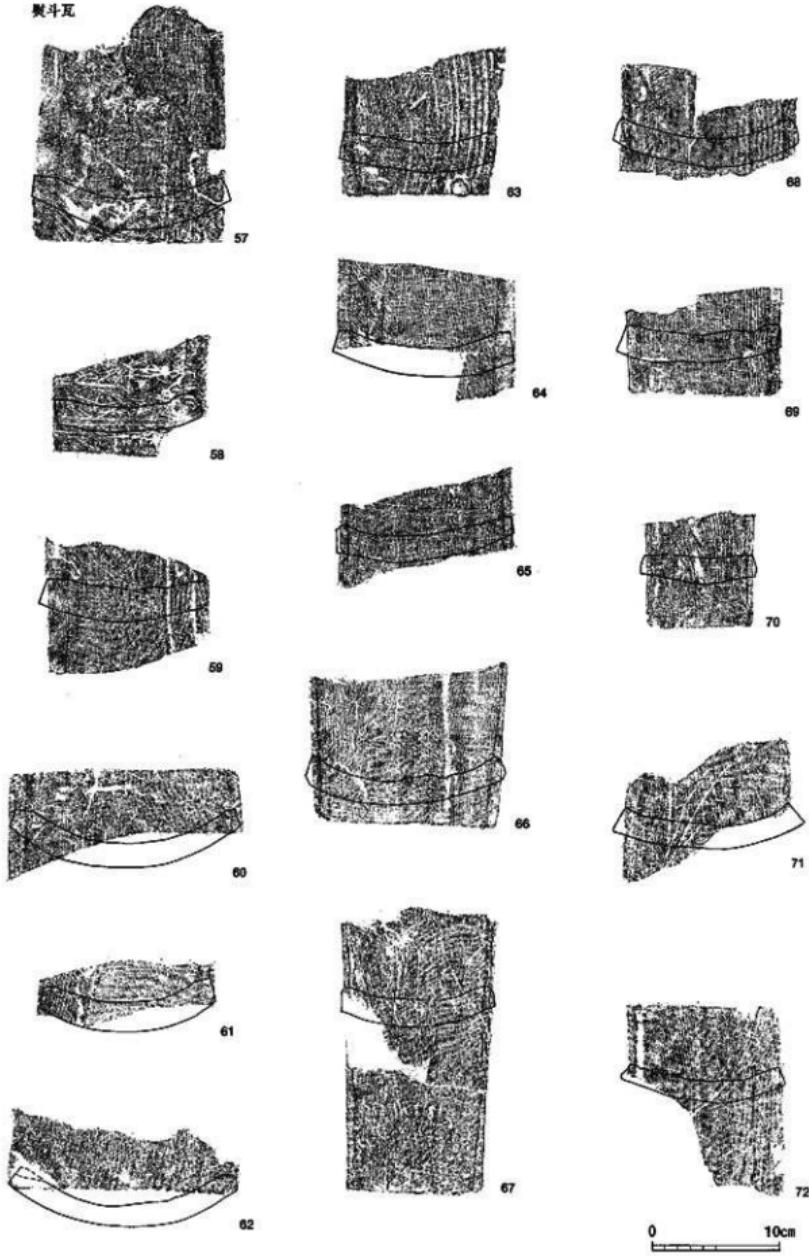


図10 薩井瀬ノ北遺跡出土瓦（6）熨斗瓦

熨斗瓦（図10-57～72）・・・16点出土。熨斗瓦としては大きすぎるもの（60）（62）もあるが、平瓦としては小さすぎるため、今回は熨斗瓦として考えた。これらは形態的に雁振瓦の可能性も考えられる。16点とも焼く前に熨斗瓦として製作されており、1つを除き、厚さが安定する事や、全て横ナデをおこなうこと、（71）を除き内側縁を面取りするといった共通点を持つ。また、出土地層にある程度固まる傾向がある。桶巻造りと判断できるものは外幅の数値－内幅の数値の差が大きい傾向がある。このことから、製作技法の不明なものは、これを考慮すれば分類できる可能性がある。側面は調整をおこなうものと、未調整のものとがある。（71）（72）は側面に分割後に破面を残す技法である。これは平瓦には見る事はできず、熨斗瓦のこのグループにのみ見られる。

熨斗瓦観察表

番号	タキ	凸面ヨコナデ	厚さ	内幅	外幅	押板痕	焼成	色調	側面調整	内側縁面取り	貼付け跡	備考
57	不明	○	24	14.5	15.5	○	良好	褐灰色	×	○	74	粘土板合わせ目
58	タテナワ	○	23	11.0	11.5	×	不良	灰褐色	○	○	61	
59	不明	○	25	12.3	13.1	○	良好	褐灰色	×	○	80	
60	タテナワ	○	20	17.0	17.8	×	良好	灰色	×	○	57	
61	不明	○	24	13.1	13.6	×	良好	灰色	×	○	78	粘土板合わせ目
62	不明	○	20	16.5	17.7	×	不良	灰色	×	○	61	
63	不明	○	24	11.6	12.0	×	良好	灰色	×	○	20	
64	不明	○	24	13.5	14.2	×	良好	灰色	×	○	19	粘土板合わせ目
65	不明	○	19	13.4	13.9	○	良好	灰色	×	○	20	
66	不明	○	21	14.3	15.5	×	良好	灰褐色	○	○	73	
67	ナナメナワ	○	22	11.4	11.9	×	良好	白灰色	○	○	61	
68	ナナメナワ	○	21	13.2	14.5	×	良好	灰色	○	○	57	
69	ナナメナワ	○	22	11.7	12.7	×	良好	灰色	○	○	61	
70	ナナメナワ	○	20	8.4	8.8	×	良好	灰色	○	○	80	
71	不明	○	18	12.6	14.8	○	良好	灰色	×	×	61	桶巻作り
72	ナナメナワ	○	14	11.7	13.0	○	良好	白灰色	×	○	73	桶巻作り

面戸瓦（図11-73～77）・・・2種、5点出土。I種はT字形のものが3点あり、玉縁部から作るもの、丸瓦胴部から作るものがある。また、後者は端面を面取りしたものと、未調整のものに分かれれる。II種は逆台形のものが2点あり、丸瓦の側面をそのまま残し、舌部としている。

道具1（図11-78）・・・用途は不明。段差から判断すると、鷲尾の一部か鬼瓦の外縁か。

道具2（図11-79）・・・用途は不明。形態が面戸瓦に似る。

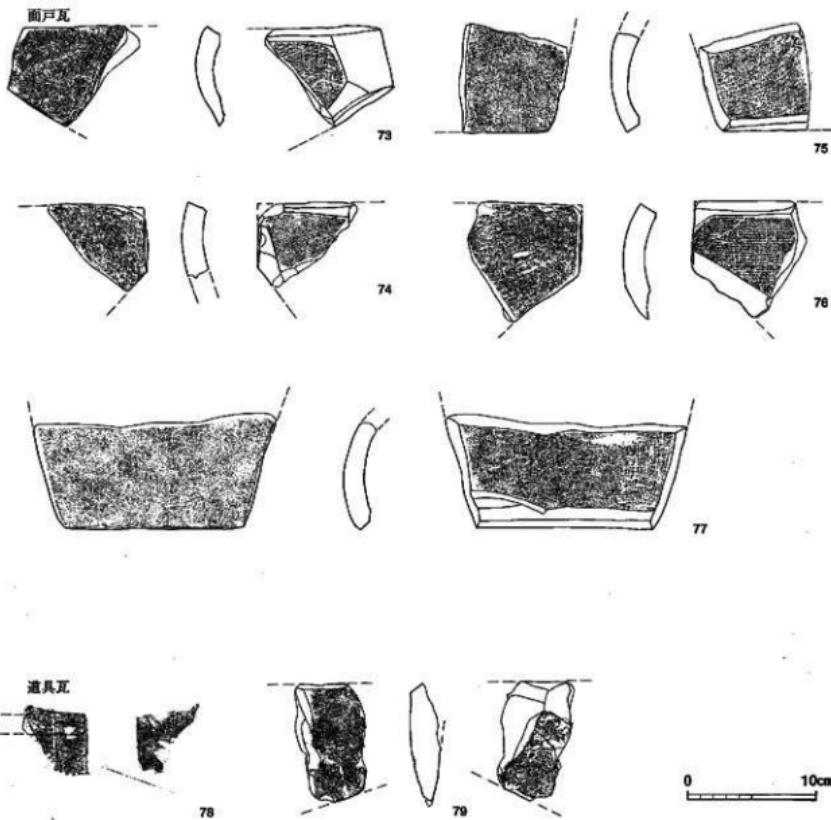


図11 菜井瀬ノ北遺跡出土瓦（7）面戸瓦・道具瓦

#### (4)まとめ

今回の調査で古代の瓦窯を推定できる遺構が検出されたことは、これまで全く遺跡の内容が不明であった薬井地域の埋蔵文化財の一端を知る上で、非常に大きな成果である。また、軒丸瓦6272-軒平瓦6644が出土する遺跡は「平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査」に詳しく挙げられており、これに本薬師寺を加える程度である。組み合わせて出土している遺跡やどちらかのみの遺跡もあり、消費地と生産地の関係が明確にはなっていない状況で今回生産地の一つが確認できたことも大きな成果である。

ところで、調査地周辺の地形や、耕作や水路の掘削に伴い数カ所で古瓦が出土している地点などを考慮すると、これまで「奈良県遺跡地図10-B-68」として示されていた遺物散布地とは別に遺跡の範囲を考える必要がある。今後の調査により窯跡や工房などの建物跡が確認されれば、工房の想定地は宮ノ後にあたり、小字瀧ノ北の範囲だけではなくなるので、弥生時代以降の遺物散布地である薬井瀧ノ北遺跡とは別の遺跡である「薬井瓦窯跡」として認識しなければならない。しかし、現状では遺跡の詳細は推測の域を出ないので、一応の推定範囲を遺物散布地として拡大しておき、今後の調査を待ちたい。したがって、本書での遺跡名は「薬井瀧ノ北遺跡」としておく。

さて、今回の調査で検出した灰原を伴う瓦窯の瓦そのものが長屋王邸で使用されたと確定するには根拠が乏しいが、長屋王邸の瓦とされる軒丸瓦6272-軒平瓦6644のそれぞれ2種が一括で出土している点、また、丸瓦・熨斗瓦・面戸瓦等の製作技法全体に共通する要素が多く見られる点、遺跡内に複数の窯が存在することが想定できることなどを総合的に勘案すると、薬井瀧ノ北遺跡（薬井瓦窯跡）で作られた瓦が長屋王邸および長屋王家に関わる寺院等で使用されたと考えてよいと思われる。また、当該遺跡の南南東1kmに位置する下牧瓦窯付近で軒平瓦6644Bが出土していることも、この地域で長屋王家の瓦が生産されていたことを示すものであろう。さらに、今回の調査では出土しなかった片岡王寺式の軒平瓦が調査地付近で採集されているならば、近くに片岡王寺の瓦を焼いた窯も存在することとなる。複数の窯で複数の寺院等に供給する瓦を焼いていたものと考えられる。また、長屋王邸出土の全ての瓦と照合していないので、薬井瀧ノ北遺跡出土の瓦と全く同範の瓦が存在する可能性は否定できない。そのことは長屋王邸所用の瓦は複数の窯で焼かれた可能性も考えられるということである。

薬井瀧ノ北遺跡の所在地は長屋王邸跡出土木簡にある「片岡」の地域に含まれる。「片岡」は長屋王家の御園があった場所で、ハス・カブラ・フキ等の蔬菜を進上していたことが木簡の記事からわかっている。今回新たに瓦もこの地で製作していることが判明したことで、当該地域は長屋王と非常に関わりの深い地域であることが確認されたとともに、奈良時代初頭の上級貴族の経済的基盤について考察する上でも新たな資料となった。

王寺町・河合町・上牧町・香芝市・大和高田市域にかけての「片岡」の地では長屋王に関わる遺跡が多く存在する。

大和川にほど近い西安寺は、渡来系氏族の大原史氏の創建とする説がある。

王寺町の町名の由来ともなっている片岡王寺（放光寺）は、「放光寺古今縁起」では敏達天皇第三皇女の片岡姫が営んだ片岡宮の寺に改め片岡寺としたことに始まると伝え、また、敏達天皇後裔の大原真人氏の創建とも考えられている。この片岡王寺の南には芦田池があり、敏達天皇の孫で、押坂彦人大兄皇子の子である茅渟王の片岡葦田墓の所在地と考えられている。

平野古墳群は7世紀代の古墳群で、中でも7世紀中ごろに築造されたとみられる横口式石槨を有し、爽糸棺片などが出土した平野塚穴山古墳についても茅渟王の片岡葦田墓の可能性が考えられている。平野古墳群の南側に営まれた平野窯跡群は6世紀後半から7世紀初頭に須恵器を焼いた窯と瓦を焼いた窯が確認されている。

下牧瓦窯跡では664Bの軒平瓦が出土している。

尼寺北廃寺・尼寺南廃寺とともに敏達天皇系の茅渟王とその一族による造営とみられており、6272Bが出土している。

また、片岡は古代の郡制では葛下郡であるが、東に隣接する廣瀬郡を含めて考えると、この地域には、押坂彦人大兄皇子の成相墓の可能性が高いとされる牧野古墳があり、長屋王の父で天武天皇の子である高市皇子の三立岡墓も廣瀬郡内に比定されている。天武天皇は茅渟王の孫にあたる。さらに、可能性の一つとして、敏達天皇の百濟大井宮や廣瀬の殯宮、押坂彦人大兄皇子の水派宮、高市皇子の殯宮が廣瀬郡内にあったことが考えられている。天武天皇も現在の廣瀬神社とされる廣瀬の河曲に大忌神を祀り、廣瀬の地を重要視している。このように、片岡とその周辺地域においては、敏達天皇－押坂彦人大兄皇子－茅渟王——天武天皇－高市皇子－長屋王という系譜と非常に関わりの深い地域であったと思われ、このような歴史的背景の中で薬井瀧ノ北遺跡が形成されたと理解できる。

#### 参考文献

保井芳太郎『大和上代寺院志』大和史學會1932

奈良國立文化財研究所編『平城京九条大路－県道城廻り線予定地発掘調査概報Ⅰ』奈良縣教育委員会1981

奈良県立橿原考古学研究所編『河合町文化財調査報告第3集 長林寺 範囲確認調査報告』河合町教育委員会1990

河合町教育委員会編『河合町文化財調査報告第4集 河合町遺跡詳細分布調査報告』河合町教育委員会1990

小林謙一「長屋王邸宅の屋根瓦」（奈良國立文化財研究所編『平城京長屋王邸宅と木簡』奈良縣教育委員会1991）

奈良國立文化財研究所編『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』奈良縣教育委員会1995

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査研究報告第1冊 史跡大安寺境内I－杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告－』奈良市教育委員会1997

奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡地図第2分冊（第3版）』奈良県教育委員会1998

王寺町史編集委員会『新訂王寺町史』王寺町2000

香芝市二上山博物館編『香芝市文化財調査報告第4集 尼寺廃寺I－北廃寺の調査－』香芝市教育委員会2003

廣岡孝信『足跡寺遺跡』（『奈良県遺跡調査概報2003年（第二分冊）』奈良県立橿原考古学研究所2004）

廣岡孝信『下牧瓦窯跡』（『大和を掘る22 2003年度発掘調査速報展』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2004）

## 2. 舟戸・西岡遺跡の調査

### (1) 調査の契機と経過

舟戸・西岡遺跡は通称舟戸山の山頂部と東側斜面部に広がる遺跡である。王寺町舟戸と河合町大輪田にまたがる。「西岡」とは小字に西岡代や西ノ山という地名があり、それらを含む河合町大輪田のうちの舟戸山にかかる地域の通称となっている。西岡では古くより石器や弥生土器が耕作によつて出土することが知られていた。1989（平成元）年度に遺跡分布調査を実施し、西岡遺跡として『河合町遺跡詳細分布調査報告』に登載した。その後、1997（平成9）年度には舟戸山の頂部の王寺町舟戸で竪穴住居跡が検出され、弥生時代後期の高地性集落の可能性が考えられるようになった。

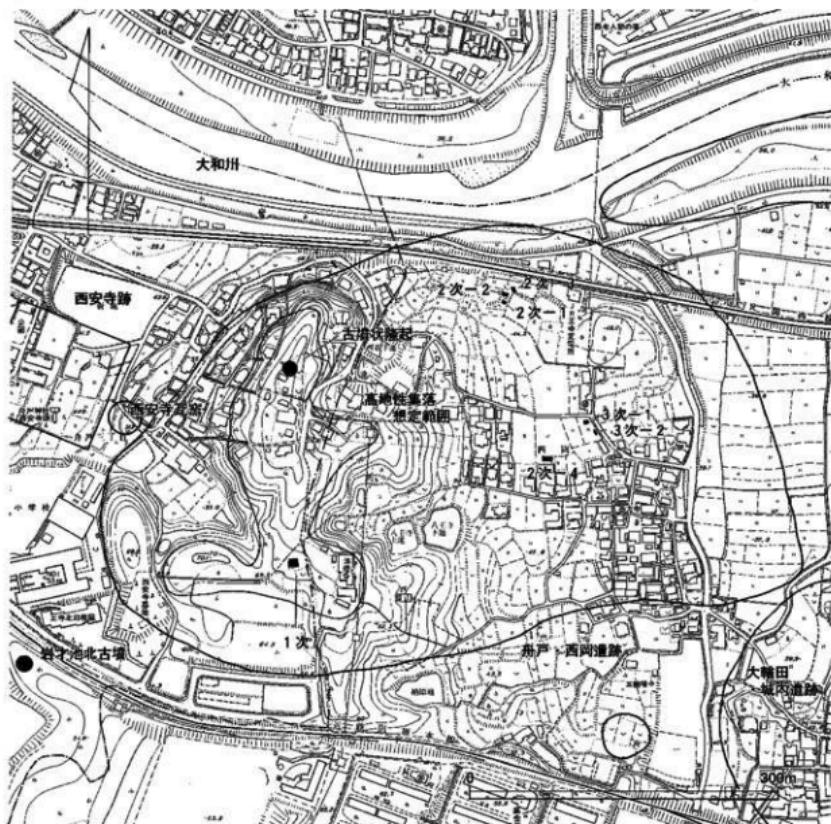


図12 舟戸・西岡遺跡調査地位置図

報告者により、概ね標高70メートル以上に高地性集落の範囲が想定されている。この高地性集落の範囲の大半は王寺町舟戸であるが、東端部は河合町大輪田地内である。また、通称舟戸山の東側斜面から山麓にかけても弥生時代以降の遺物が散布していることから、広範囲の遺物散布地として1998（平成10）年刊行の『奈良県遺跡地図（第3版）』に「舟戸山・西岡遺跡」として記載された。前述の王寺町舟戸での調査結果は「舟戸・西岡遺跡」として報告されている。河合町でも通称舟戸山に所在する遺跡ということで「舟戸山・西岡遺跡」の名称を用いてきたが、遺跡名については地名によるという原則から、遺跡名の統一を図り今後「舟戸・西岡遺跡」と呼称することとする。また、高地性集落と推定する地区の内容が確認され、範囲が明確になった場合には、この高地性集落部分を「舟戸山遺跡」とすべきであろう。

さて、大輪田420番地1において、建物の建設が計画された。当該地の南西側約50メートルの位置の425番地では、2001（平成13）年度に掘立柱建物が検出されており、当該地まで緩やかな傾斜面上に段状に耕作地が展開することから、当該地においても遺構の存在が考えられた。

1997（平成9）年度の奈良県立橿原考古学研究所による調査を第1次調査、2001（平成13）年度の河合町教育委員会が実施した調査を第2次調査とし、今回の調査を第3次調査とする。

当初の計画では現状の耕作土面から基礎のための掘削を行う予定であり、基礎工事により包含層はもとより遺構面まで掘削されることが予想された。このため、緊急発掘を行うべく日程の調整をしていたが、急遽、設計を変更され、敷地全体に盛土を行ったうえで基礎の掘削を行うこととなつた。この盛土を施すことで基礎工事に伴う掘削は盛土と耕土内で収まると考えられたので、基礎工事の際に立ち会うこと工事を先行することになった。しかし、建物の工事に伴う足場が除去された段階で、基礎の深さと造構

面の深さとの関係を確認することと、第2次調査で確認された掘立柱建物等の遺構の分布状況を確認するため、発掘調査を行うこととした。

## （2）遺構

敷地の東側に南北4.7メートル、東西幅1.1メートルの第1トレンチを設定した。第1トレンチでは包含層中に南北方向の素掘り溝が2条検出された。中世以降の耕作に伴う素

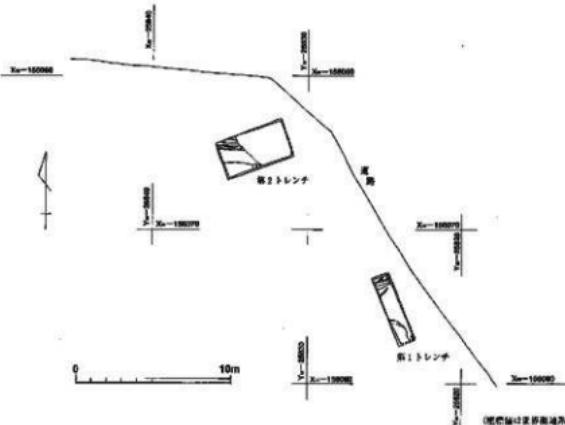
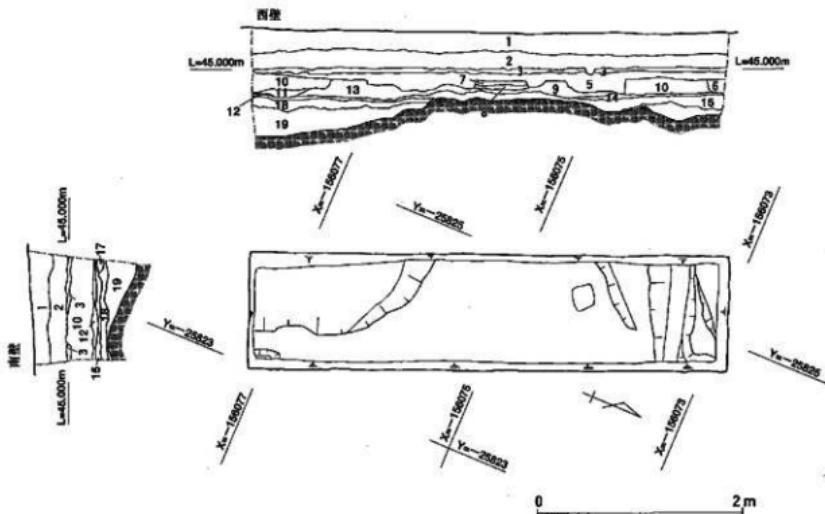


図13 舟戸・西岡遺跡トレンチ配置図

掘り溝で方向は北北西 - 南南東で、現在の耕作痕の方向とほぼ一致し、時期の特定はできないが、さほど土地利用の形態の変化は無いようである。

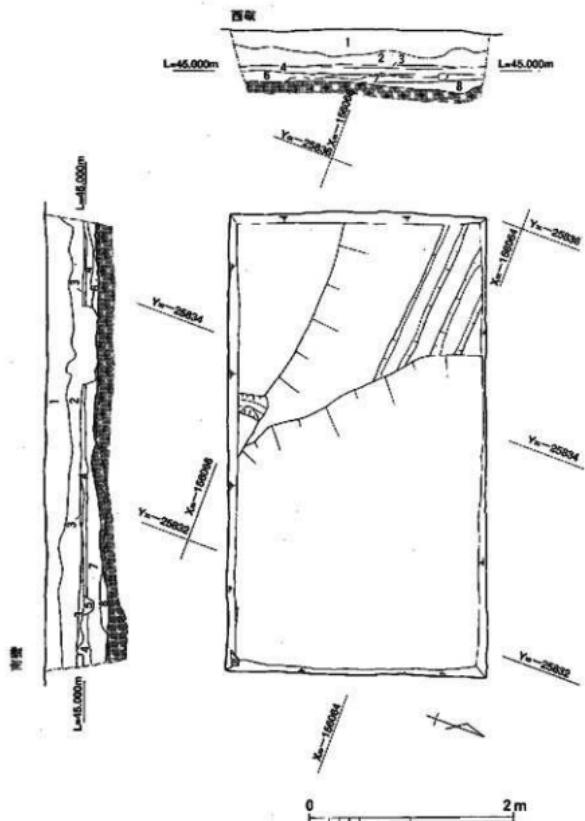
包含層を除去すると、南西隅部ですり鉢状を呈する落ち込みを検出した。調査面積が狭くこの遺構の性格を確定することはできないが、この遺構の埋土中からは中世の土器が出土しているので、中世から近世にかけて行なわれたとみられる農地の整備の際に形成された遺構と思われる。

第2トレンチは敷地の北側に設定したトレンチで、南北2.5メートル、東西4.5メートルである。トレンチ南壁の西端から2.3メートル、北壁の西端から1.3メートルの地点から地山が緩やかに南西から北東に傾斜する。素掘り溝を2条検出したが、この素掘り溝はトレンチの西半では地山を掘削して



層位番号	土色・軽色名	土色軽色記号	土質	備考
1	に赤い斑塊名	10Y R 4/3	砂質	
2	オリーブ色	5Y 3/1	砂質土	耕作土
3	褐色	7.5Y R 6/8	砂質土	
4				欠番
5	灰オリーブ色	6Y 4/2	砂質土	
6	灰色	10Y S 1	砂質土	
7	別荘褐色	10Y R 6/8	砂質土	
8	暗褐色	10Y R 3/4	砂質土	
9	暗褐色	7.5Y R 3/3	砂質土	
10	灰オリーブ色	5Y 5/2	砂質土	
11				10層にマンガン含む。
12	暗褐色	10Y R 3/4	砂質土	
13	灰オリーブ褐色	25Y 4/3	砂質土	
14	明褐色	10Y R 6/8	砂質土	7型と同じ
15	灰褐色	10Y R 4/2	砂質土	鐵道跡か。マンガンを多量に含む。
16	暗オリーブ色	25G Y 4/1	砂質土	
17	明褐色	25G Y 7/1	粘質土	塊状
18	暗灰褐色	25Y 4/2	砂質土	炭を含む。
19	暗褐色	25Y 3/2	粘質土	
20	黄褐色	10Y R 5/8	砂質	地山。チャート層を多く含む。マンガンを多く含む。

図14 角戸・西岡遺跡第1トレンチ平面図及び土層断面図



層位番号	上色調色名	土色調色番号	土質	備考
1	にぶい黄褐色	10Y R 4/3	砂質土	
2	オリーブ褐色	5Y 3/1	砂質土	耕作土
3	オリーブ褐色	7.5Y 3/2	砂質土	旧耕作土
4	褐色	7.5Y R 6/8	砂質土	層の上辺が褐色、層の下辺が褐色気味。旧灰土。
4'		7.5Y R 4/6		3層と4層が混在。
5	灰オリーブ色	5Y 4/2	砂質土	
6	灰色	10Y 5/1	砂質土	
7	灰褐色	10Y R 4/2	砂質土	乾燥層か、マンガンを多量に含む。
7'	灰色	7.5Y 5/1	砂質土	素掘り層。
8	灰オリーブ色	5Y 5/2	砂質土	
9	灰色	5Y 5/1	砂質土	
10	灰色	7.5Y 5/1	砂質土	7' 層・23層と同じ。
11	褐色	7.5Y R 6/8	砂質土	旧灰土。
12	灰色	7.5Y 5/1	砂質土	7' 層・23層と同じ。
13	灰色	7.5Y 5/1	混在、旧耕作土・灰土。	
	褐色	7.5Y R 6/6		
14	灰色	7.5Y 5/1	砂質土	素掘り層。
15	灰色	7.5Y 5/1	砂質土	素掘り層。
16	灰色	7.5Y 5/1	旧耕作土	
17	灰オリーブ色	5Y 5/2	砂質土	8層にマンガンを含む。
18	オリーブ褐色	2.5Y 4/4	砂質土	発山。
19	オリーブ褐色	2.5Y 4/4	砂質土	16層と同様。
20	灰オリーブ色	7.5Y 6/2	砂	水分を多く含む。発山。
21	灰オリーブ色	7.5Y 6/2	砂	20層と同様。
22	オリーブ褐色	2.5Y 4/4	砂質土	18層と同様。
23	灰色	7.5Y 5/1	砂質土	素掘り層。

図15 舟戸・西岡遺跡第2トレンチ平面図及び土層断面図

おり、東半では包含層を掘り込んでいる。素掘り溝の方向は第1トレンチの素掘り溝とは異なり東西方向であるが、土地の区画形状に由来する方向の違いとして理解できるのではないだろうか。

### (3) 遺物

第1トレンチ及び第2トレンチの包含層と遺構の埋土から出土した遺物はいずれも碎片である。種類としてはサヌカイト・弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器がある。そのうち、図示が可能なものを掲載しておく。

1～6は須恵器である。

1は第1トレンチ第3層の出土である。甕や壺の体部と考えられる。外面にカキ目状の痕跡がみられる。内面は摩滅が著しく不明である。器壁厚は0.7センチメートルを測る。色調は灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

2は第2トレンチ第2層（耕土）の出土である。外面はタタキのち、回転カキ目調整を施す。内面に同心円文の当て具痕跡がみられる。器壁厚は0.6センチメートルを測る。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好である。

3は調査地での出土ではなく、調査地から80メートル北方の地点で採取したものである。外面は平行タタキしたのち、回転カキ目調整する。内面に同心円文の当て具痕跡がみられる。器壁厚はやや厚く0.8センチメートルを測る。外面は暗青灰色を呈し、内面は淡青灰色を呈する。焼成はやや軟質である。

4は第2トレンチ第3層の出土である。外面はハケ調整。内面は回転ナデ調整。器壁厚は0.6～0.8センチメートルを測る。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。外面には灰の降着がみられる。

5は第2トレンチ第2層（耕土）の出土である。外面の上半部は回転ナデ調整。下半部はケズリのち回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整。器壁厚は0.6センチメートルを測る。趣様の器種と考えられるが、確定はできない。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

6は第2トレンチ第3層の出土である。壺蓋のツマミ部分である。扁平な粘土円盤を貼り付けている。色調は淡青灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

7は瓦質土器の擂鉢で、片口部分である。器壁厚は0.7センチメートルを測る。色調は淡青灰色を呈し、焼成は軟質である。

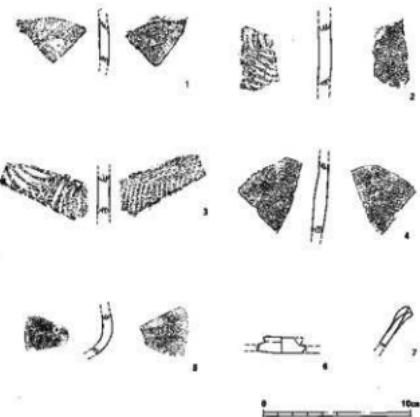


図16 舟戸・西岡遺跡出土遺物

#### (4) まとめ

2ヶ所のトレンチで確認したところでは、盛土層が約30センチメートル、耕土層が約20センチメートルである。調査の原因となった建物の基礎は包含層直上までの掘削施工であり、遺構への影響はほとんどない。

調査地は舟戸・西岡遺跡の西岡地区における集落跡の東端部にあたる。今回の調査地では若干の遺構を検出したが、古代の明瞭な遺構は存在しないようである。調査面積が狭小であり、確定的なことは言えないが、可能性の一つとして想定された弥生時代の溝等の遺構は検出されなかった。また、古墳時代以降の塀や柵といった類の遺構も検出されなかった。調査地での遺構は素掘り溝と土壌で南西方の第2次調査地での状況と比較すると、遺構が希薄である。遺跡の主要部からは外れていることが明らかになった。

遺物散布地の範囲としては、丘陵の裾部付近までをその範囲としているが、掘立柱建物などは第2次調査地周辺の標高46メートル前後の高さに集中するようである。現在の集落そのものが、古代からの集落の位置に重複しているものとみられる。

この位置は大和川の氾濫にも被害を受けない位置で、東向きの陽当たりのよい場所である。また、大和川を見下ろし、大和川の舟運の管理を行うという点でも絶好の立地条件である。舟戸・西岡遺跡ではこれまで弥生時代後期の遺物・遺構が知られてきたが、第2次調査地での遺物・遺構の状況にあわせて、今回の調査でも包含層の遺物に須恵器が多く見られることから、古墳時代以降奈良時代くらいまでに何らかの建物が複数建っていたことが考えられる。ひとつの可能性として、西岡の中心地域には大和川の舟運に関連する施設があったのではないだろうかということを提起しておきたい。

#### 参考文献

- 鈴木裕明「北葛城郡王寺町舟戸・西岡遺跡第1次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1997年度』(第3分冊) 奈良県立橿原考古学研究所1998  
奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡地図第2分冊(第3版)』奈良県教育委員会1998  
王寺町史編纂委員会『新訂王寺町史』王寺町2000

図版1

葉井瀧ノ北遺跡

葛城山

淹川

葛下川

調査地  
▶



①片岡地域と葉井瀧ノ北遺跡（北上空から）



②第1トレンチ灰原半掘状況（南から）



①遺跡全景（西上空から）



②調査地全景航空写真（垂直）



①調査地遠景（西から）



②第1トレンチ調査前（北から）



③第1トレンチ調査前（南から）



①灰原検出状況（西から）



②灰原検出状況（東拡張後・南から）



③西拡張区瓦充填暗渠検出状況

図版5

葉井瀬ノ北遺跡 第1トレンチ



①灰原検出状況（西拡張後・南から）



②灰原検出状況（西拡張後・西から）



③灰原検出状況（西拡張後・東から）



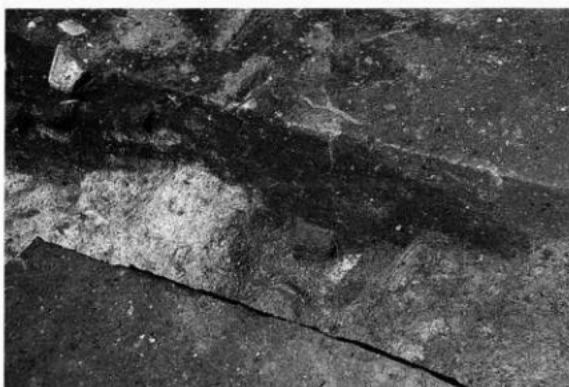
①南側半掘状況（南から）



②南側半掘状況（西から）



①南側半掘状況（東から）



②焼土塊検出状況（東から）



③焚口付近（西から）



①第4トレンチ（西から）



②第5トレンチ（北から）



③第6トレンチ（西から）



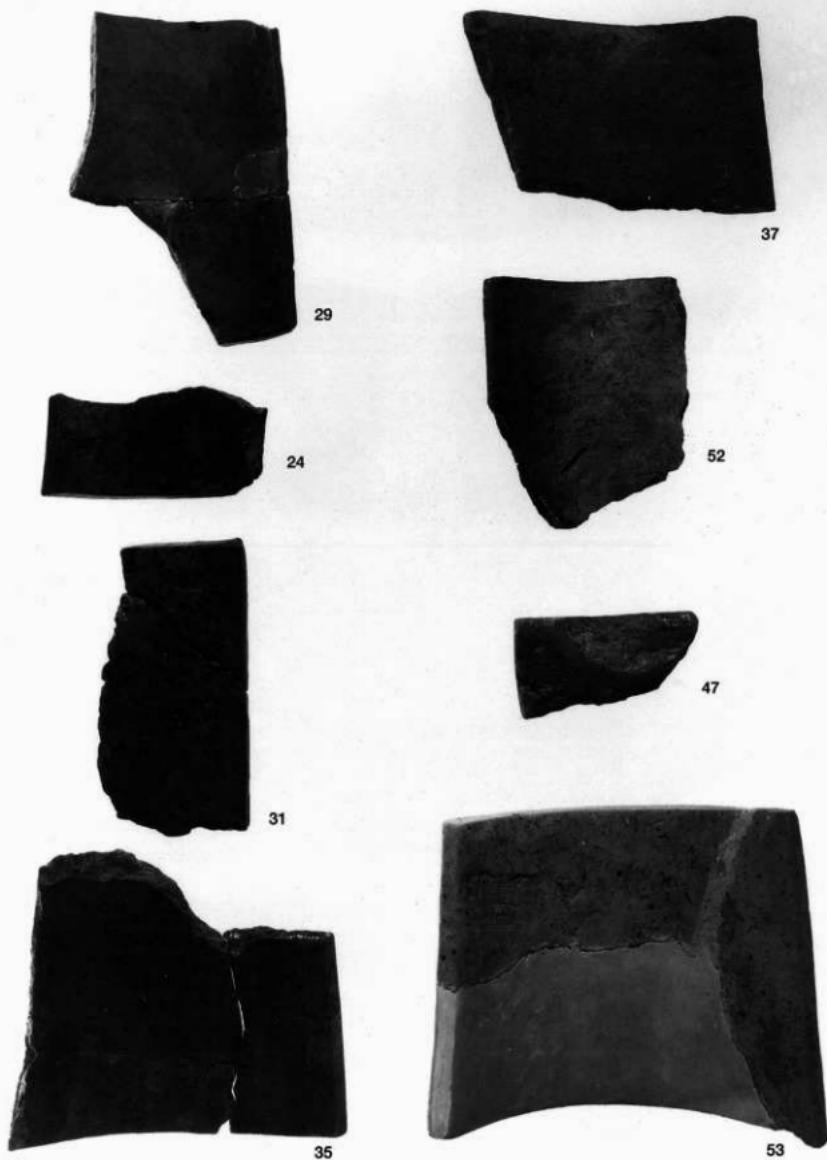
18

片岡王寺式

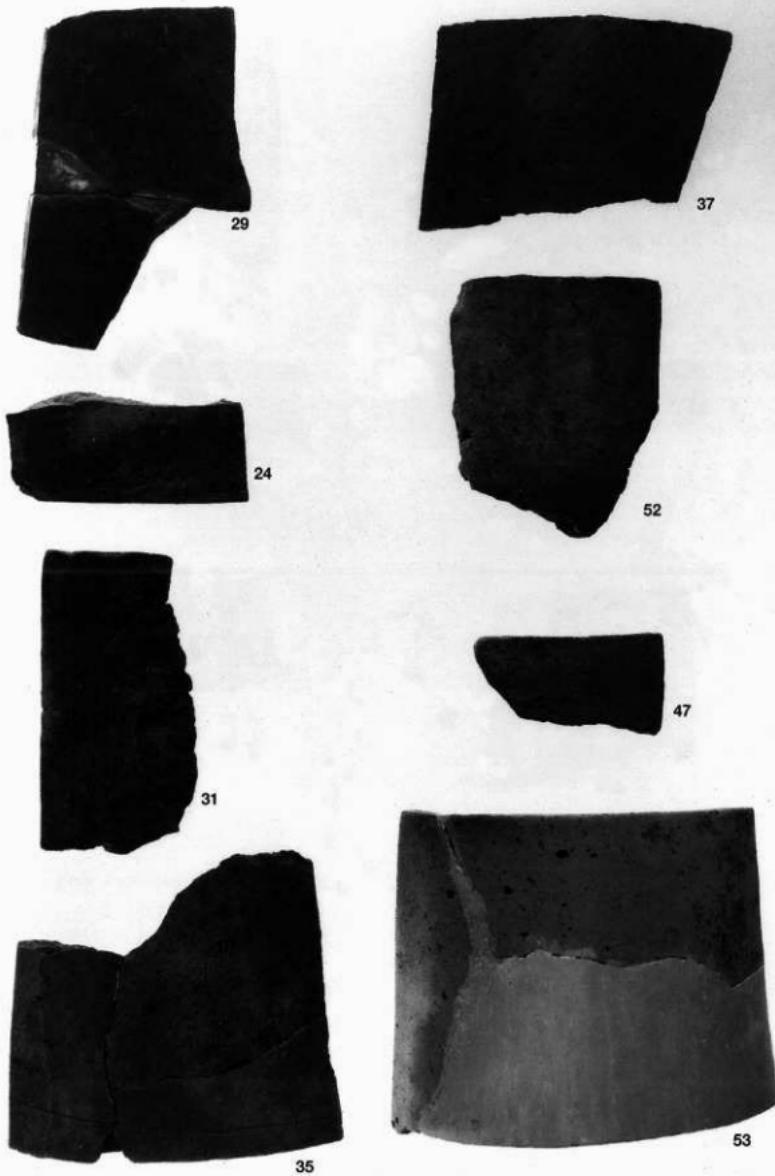


19

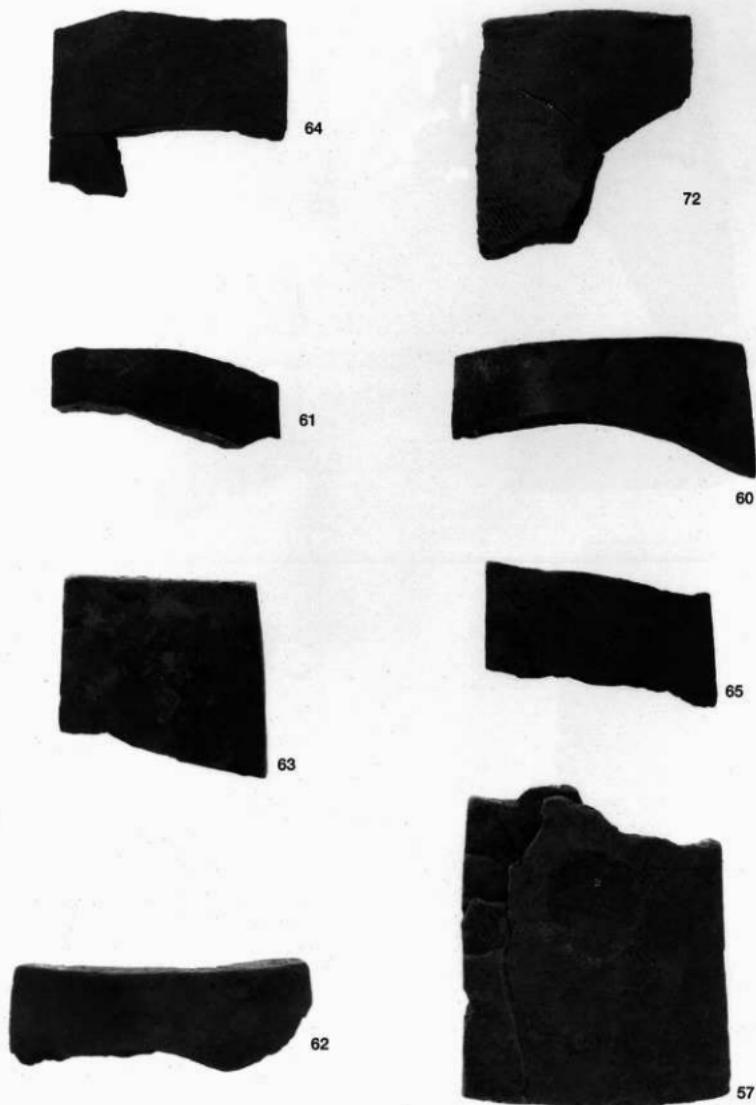
出土遺物（1）軒平瓦



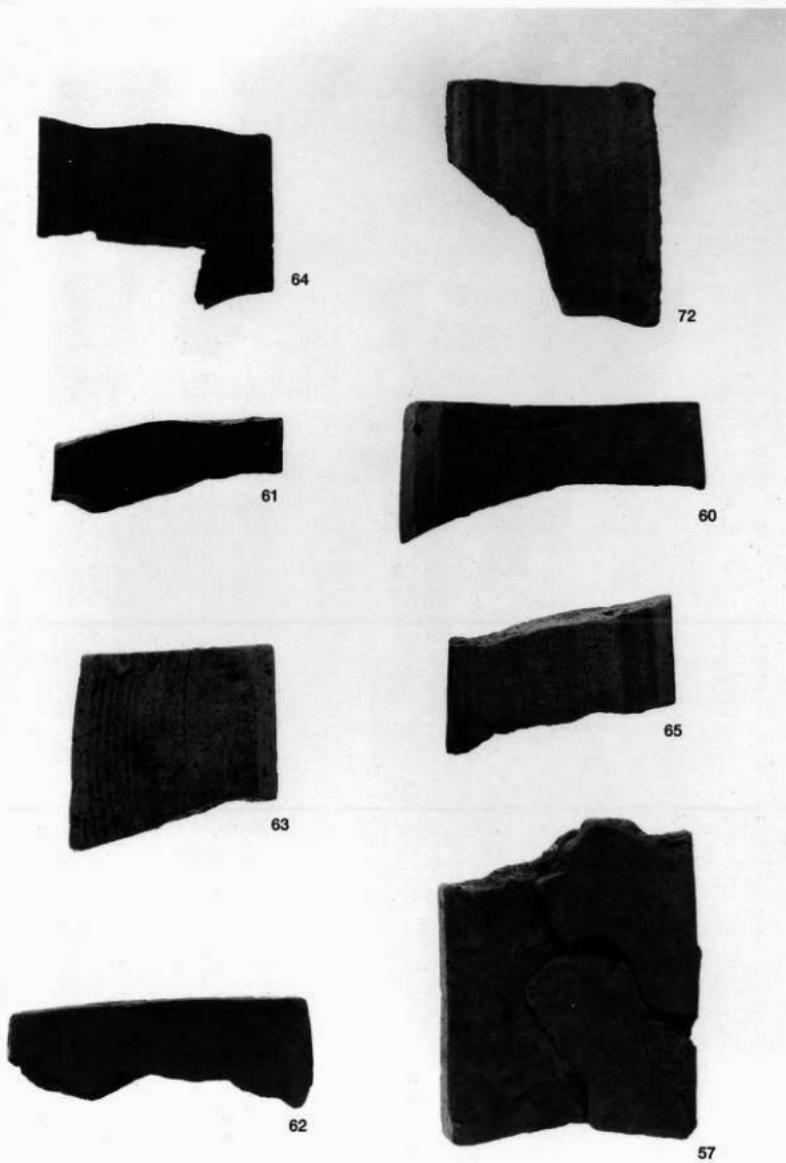
出土遺物（2）平瓦（凹面）



出土遺物（3）平瓦（凸面）



出土遺物（4）炭斗瓦（凸面）



出土遺物（5）熨斗瓦（凹面）



76



73



74



75



77



78



79



20



21

出土遺物（6）面戸瓦・道具瓦・丸瓦（凸面）



76



73



74



75



77



78



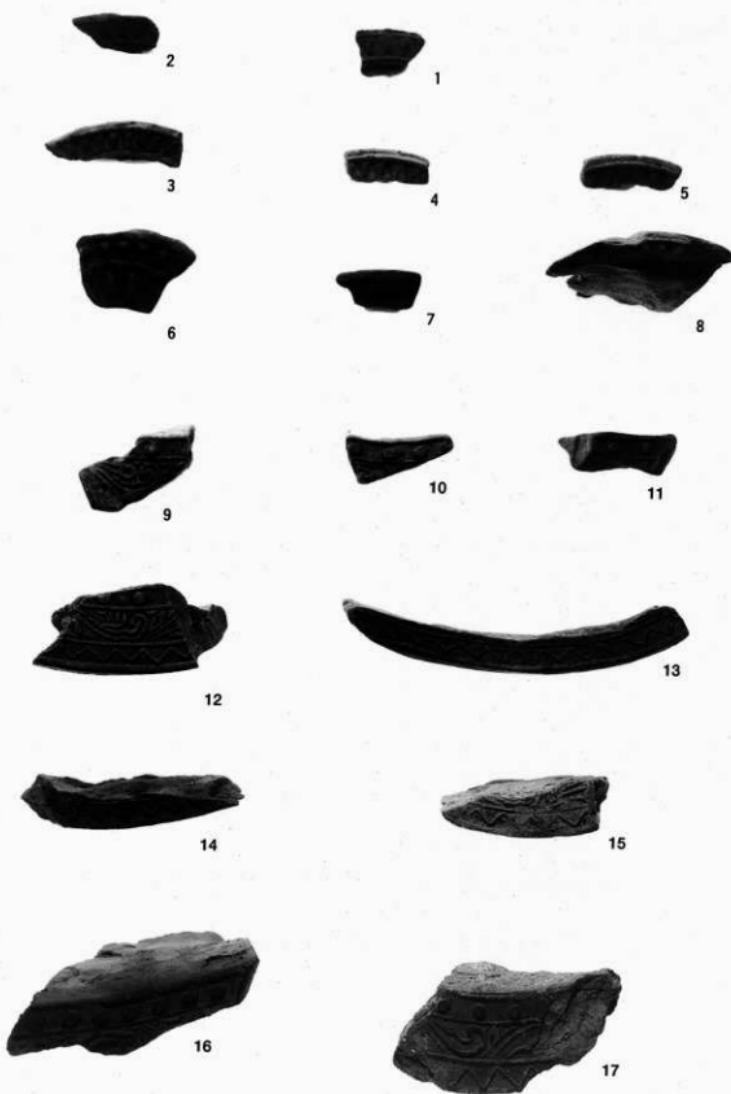
79



20



21



出土遺物（8）軒丸瓦・軒平瓦



①遺跡全景（東上空から） 大和川を挟んで右に神南遺跡、左が舟戸・西岡遺跡



②調査地全景航空写真（垂直）



①調査地遠景（西から）



②第2トレンチ調査前（東から）



③第1トレンチ掘削状況（北から）

図版19

舟戸・西岡遺跡 第1トレンチ



①遺構検出状況（北から）



②遺構完掘状況（北から）



③遺構完掘状況（北東から）

図版20

舟戸・西岡遺跡 第2トレンチ



①遺構検出状況（西から）



②遺構完掘状況（西から）



③遺構完掘状況（東から）

ふりがな	くすりいたきのきたいせき ふなと・にしのおかくせき								
書名	薬井瀧ノ北遺跡 舟戸・西岡遺跡								
副書名									
巻次									
シリーズ名	河合町文化財調査報告								
シリーズ番号	第17集								
編著者名	吉村公男 岡田雅彦								
編集機関	河合町教育委員会								
所在地	〒636-8501 奈良県北葛城郡河合町池部1-1-1 Tel0745-57-0200								
発行年月日	西暦 2005年3月31日								
ふりがな 所収遺跡 所在地	ふりがな 所収遺跡 所在地	ニード 市町村	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因		
薬井瀧ノ北 遺跡	奈良県 北葛城郡 河合町大字薬井	29427	006	34 35 2	135 42 43 2004年2月23日 ～3月31日	555	緊急発掘		
舟戸・西岡 遺跡	奈良県 北葛城郡 河合町 大字	29427	002	34 35 34	135 43 6 2005年2月7日 ～2月18日	150	緊急発掘		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
薬井瀧ノ北遺跡	瓦窯跡	奈良時代初期	灰原	瓦・須恵器・炭	長屋王邸出土瓦と同型式の6272A・B及び 6644A・Cが出土。				
舟戸・西岡遺跡	遺物散布地	弥生時代～	土壇・素掘り溝	弥生土器・サヌカイ ト・須恵器・土師器・ 瓦器・瓦質土器1・ 陶磁器	第3次調査。				

---

桑井瀧ノ北遺跡  
舟戸・西岡遺跡  
- 河合町文化財調査報告 第17集 -

2005年3月31日

編集 河合町教育委員会  
発行 奈良県北葛城郡河合町池部1-1-1  
TEL 0745-57-0200  
FAX 0745-57-3132  
URL <http://www.town.kawai.nara.jp/>  
E-mail [syohgaigakusyu@town.kawai.lg.jp](mailto:syohgaigakusyu@town.kawai.lg.jp)  
印刷 株式会社明新社

---